

① 第11代将軍徳川家斉の子女

続柄	名前	生年～没年	備考	母
長女	淑姫	1789～1817	尾張藩主徳川斉朝 (10) 正室	B
次女	瓊岸院	1790		B
長男	竹千代	1792～1793		B
次男	家慶	1793～1853	第12代将軍	C
3女	端正院	1794		D
4女	綾姫	1795～1797	仙台藩主伊達周宗(9) 婚約	B
3男	敬之助	1795～1797	尾張藩主徳川宗睦 (9) 養子	E
4男	敦之助	1796～1799	清水徳川家 (2)	A
5女	総姫	1796～1797		F
流産	清雲院	1798		A
6男	豊三郎	1798		E
流産	即幻院	1798		F
6女	格姫	1798～1799		G
7女	五百姫	1799～1800		E
8女	峰姫	1800～1853	水戸藩主徳川斉脩 (8) 正室	H
8男	斉順	1801～1846	清水徳川家(3) 当主→紀伊藩主(11)	H
9女	舒姫	1802～1803		E
10女	亨姫	1801～1802		I
流産	法如院	1802		J
流産	真空院	1803		H
9男	時之助	1803～1805		I
11女	寿姫	1803～1804		H
12女	浅姫	1803～1857	福井藩主松平齐承 (14) 正室	J
13女	晴姫	1805～1807		H
10男	虎千代	1806～1810	紀伊藩主徳川治室 (10) 養子	I
14女	高姫	1806		K
14女	岸姫	1807～1811		L
15女	元姫	1808～1821	会津藩主松平容衆(7) 正室	K
11男	友松	1809～1813		I
16女	文姫	1809～1837	高松藩主松平頼胤(10) 正室	L
12男	齐荘	1810～1845	田安徳川家(4) 当主→尾張藩主(12)	I
13男	齐明	1809～1827	清水徳川家当主 (4)	M
17女	艶姫	1811		L
18女	盛姫	1811～1846	佐賀藩主鍋島直正(10) 正室	M
14男	齐衆	1812～1826	鳥取藩主池田斉稷 (8) 養子	M
19女	和姫	1813～1830	長州藩主毛利齐広(12) 正室	I
20女	孝姫	1813～1814		L
21女	溶姫	1813～1868	加賀藩主前田齐泰 (11) 正室	N
15男	奥五郎	1813～1814		O
16男	齐民	1814～1891	津山藩主 (8)	M
17男	久五郎	1815～1817		I
22女	琴姫	1815～1816		O
23女	仲姫	1815～1817		N
18男	信之進	1817		M
24女	末姫	1817～1872	広島藩主浅野齐肃 (9) 正室	N
19男	陽七郎	1818～1821		L
25女	喜代姫	1818～1868	姫路藩主酒井忠学(5) 正室	M
26女	永姫	1819～1875	一橋家当主徳川齐位 (5) 正室	O
20男	齐良	1819～1839	浜田藩主松平齐厚(1) 養子	M
21男	齐温	1819～1839	尾張藩主 (11)	P
22男	齐彊	1820～1849	清水徳川家当主(5)→紀伊藩主(12)	L
23男	齐善	1820～1838	福井藩主 (15)	O
24男	齐裕	1821～1868	徳島藩主 (13)	M
25男	富八郎	1822～1823		L
26男	齐省	1823～1841	川越藩主松平齐典 (4) 養子	O
27男	齐宣	1825～1844	明石藩主 (8)	O
27女	泰姫	1827～1843	鳥取藩主池田齐訓 (9) 正室	P

網掛は嘉永6年(1853)7月時点の生存者、備考( )は藩主世代、母親は欄外参照。

母親は、A正室：近衛震子(広大院)、島津重豪娘、近衛経照養女、B側室：御万の方(勢真院)、C側室：お楽の方(香琳院)、D側室：お梅の方(真性院)、E側室：お歌の方(宝池院)、F側室：お志賀の方(慧明院)、G側室：お里尾の方(超彌院)、H側室：お登勢の方(妙禪院)、I側室：お蝶の方(速成院)、J側室：お美尾の方(芳心院)、K側室：お屋知の方(清昇院)、L側室：お袖の方(本院院)、M側室：お八重の方(皆春院)、N側室：お美代の方(専行院)、O側室：お八百の方(智照院)、P側室：お以登の方(本輪院)

嘉永六年「村上家乗」参考資料(令和6・12・21) 19

◎七月十八日

① 沾湿(てんしつ) ……しつとりとぬれること。うるおうこと。

② 未曾有(みぞう/みぞう) ……いまだかつてなかったこと。非常に珍しいこと。

そのさま。なお「曾」は「曾」の俗字。

◎七月十九日

③ 将軍様御他界：江戸幕府第二二代将軍徳川家慶(一七九三～一八五三)は、嘉

永六年(一八五三)六月二十二日に六十一歳で死去。発表は七月二十一日。

嘉永六年七月廿三日 幕府は将軍家慶の裳を發し、世子家祥を上様と称せしむ

六月三日米艦の浦賀に入るや偶々将軍家慶病の篤きに会し、暫く之を秘して知らしめず、同六日に至り之を告ぐ、家慶大に之を憂ひ、阿部閣老をして水戸老侯に就き其意見を問はしめ、又同九日所司代をして米艦来船を上奏せしむ、同廿二日遂に薨す、然とも例に抛り喪を秘す、本日に至り諸侯をして登賞せしめ、昨廿二日を以て薨去せしを發表す、世子家祥(十二月廿四日に至り家定と改む、家慶の第三子なり、文政七年八月を以て世子と為す)を上様と称せしむ(上様とは将軍の尊称と為す、家慶は慎徳院と諡す)、此日公は登賞す、阿部閣老より公及仙台侯(仙台城主伊達陸奥守)へ左の幕令を交付し且同班の諸侯に通報す可き旨の達あり、依て例の如く両家々臣をして同班諸藩に通報せしむ(後略)

「芸藩志」第一卷

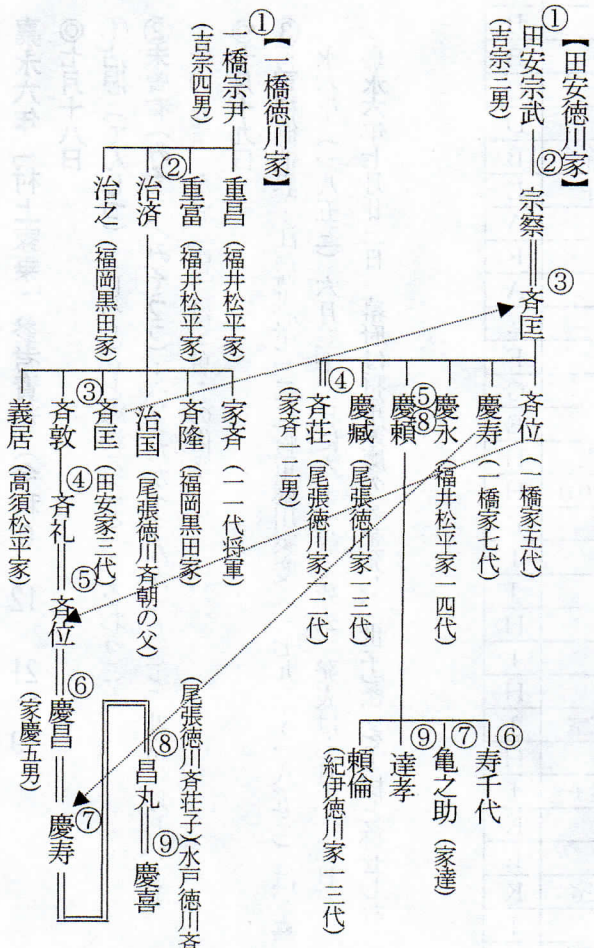
④当右大将様：江戸幕府の世子徳川家祥(いえさち/いえさき、一八二四〜五八)。

家祥は天保八年(一八三七)九月一日に従一位に昇叙し、右近衛大将を兼ねた。嘉永六年十月二十三日、内大臣に昇進(右近衛大将元の如し)、征夷大将軍(第一三代将軍)となり、十一月二十三日、家定と改名。「将軍家定公心にして且多病なりしかば、国家多難の際、諸侯を駕馭(がぎよ)、人を自分の思うままに使うこと)し、百僚に臨みて号令厳明なるが如きは得て望むべからず」(渋沢栄一『徳川慶喜公伝』)という状態であった。

\*徳川家慶の実子には一四男一三女あったが、ほとんどが早世し、二十歳を超えて生きたのは四男の家定だけであった。十歳以上は、家定以外、五男慶昌(一八二五〜三八、一橋家第六代当主)、六女暎姫(一八二六〜四〇、田安慶頼室)。

⑤御三卿様：田安家五代当主は徳川慶頼(天保十年四月〜、文久三年一月に隠居。父は田安家三代当主斉匡、将軍家斉の甥)、一橋家九代当主は徳川慶喜(弘化四年九月〜、徳川斉昭七男、慶応二年八月に徳川宗家相続、清水家は五代当主斉疆(なりかつ、将軍家斉二男)が弘化三年五月に紀伊藩二二代藩主となつて以降、慶応二年十一月に慶喜の弟昭武が清水家六代当主になるまで当主不在)。

①田安徳川家  
 田安宗武(吉宗二男) 宗察 ② 斉匡 ③  
 慶寿(一橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)  
 齊位(一橋家五代) 齊隆(福岡黒田家) 治国(尾張徳川斉朝の父) 齊匡(田安家二代) 齊敦(高須松平家) 齊礼(家慶五男) 齊位(家慶五男) 慶昌(家慶五男) 慶寿(家慶五男)  
 ④ 齊位(一橋家五代) 慶寿(二橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)  
 ⑤ 齊位(一橋家五代) 慶寿(二橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)  
 ⑥ 齊位(一橋家五代) 慶寿(二橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)  
 ⑦ 齊位(一橋家五代) 慶寿(二橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)  
 ⑧ 齊位(一橋家五代) 慶寿(二橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)  
 ⑨ 齊位(一橋家五代) 慶寿(二橋家七代) 慶永(福井松平家一四代) 慶頼(尾張徳川家二三代) 慶臧(尾張徳川家二三代) 齊壯(尾張徳川家二二代) (家斉二男)



①【清水家】 清水重重 ⑥ 敦之助 ⑤ 斉順(紀州徳川家二二代) ④ 斉明 ③ 齐疆 ② 昭武(家重二男) (家斉五男) (家斉七男) (家斉二男) (家斉二男) (水戸斉昭一八男)

⑥御三家様：尾張藩主は徳川慶恕(よしくみ、後慶勝と改名、当時四十歳、実父は尾張藩の支藩、美濃国高須藩主松平義建、その祖父は水戸藩主徳川治保、紀伊藩主は徳川慶福(よしとみ、家茂と改名、当時八歳、実父の斉順は将軍家斉の七男)、水戸藩主は徳川斉昭(実父は七代藩主徳川治紀、当時五十四歳)。

⑦紀州様：紀州藩三三代藩主徳川慶福(よしとみ、一八四六〜六六)。父は紀州藩主徳川斉順(家斉八男)。弘化四年四月に二二代藩主斉疆(家斉二男)の養子となり、嘉永二年閏四月に紀州藩を継いだ。同四年十月に元服、従三位左近衛権中将に叙任。安政五年六月に将軍家定の継嗣となり、七月の家定薨去に伴い名を家茂と改め、十月に二四代江戸幕府将軍となった。

⑧尾張様：尾張藩一四代藩主徳川慶恕(よしくみ、後慶勝、一八二四〜八三)。父は尾張藩支藩の美濃高須藩主松平義建。弟に一五代藩主徳川茂徳(高須藩主・一橋徳川家一〇代当主)、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬がある。嘉永二年六月に尾張藩主となり、従三位参議に叙任(嘉永三年十二月に権中納言。安政五年六月に日米修好通商条約に関して井伊直弼を糾弾、家定から隠居を命じられる。万延元年九月に「慶勝」と改名。元治元年に長州征討総督を命じられ広島に着陣、広島最古の写真撮影。



高須4兄弟(明治11年9月撮影) 右から徳川慶勝、徳川茂栄、松平容保、松平定敬 (ウィキペディア)

⑨御分家方御養子：尾張藩初代義直の男系血統は九代宗睦で絶え、一〇代斉朝は一橋家、一一代斉温(家斉一九男)・一二代斉荘(家斉二二男)は将軍家、一三代慶臧は田安家から入った。これらの藩主は国元へは帰国せず、赤字は幕府から補填された。幕府からの財政支援を期待し、将軍家などからの養子を期待する付家老ら江戸派に対し、幕府からの藩政介入に反発する尾張派が、支藩の美

濃高須藩から一四代藩主慶恕を迎えた。なお、水戸藩でも八代斉脩が継嗣を定めず死去した後、清水家から恒之丞（後の紀伊藩主徳川斉昭）を迎えようとする一派を抑えて、斉脩の弟の斉昭が九代藩主となった。

⑩差奇（さしより）：①はじめ。最初。②さしあたり。はじめに。

⑪松平越後守様：津山藩八代藩主松平齐民（二八二四〜九二）。父は徳川家斉（一六男）。七代藩主齐孝は無嗣のため、文化十四年に家斉の子銀之助を養子とした。この時津山藩は五万石から一〇万石に復祿した。文政十年養父齐孝に実子（慶倫）が誕生したため、齐民は安政二年五月に若隠居して確堂と号し、『明治維新人名辞典』（吉川弘文館）から抜粋



松平齐民肖像  
(ウィキペディア)

⑫越前家：親藩（家康の男系男子が始祖となる藩）のうち、御三家・御二卿を除く松平家一門のうち、その筆頭が越前松平家。越前松平家は家康の次男結城秀康（越前国北ノ庄藩の初代藩主）を祖とする諸家で、福井松平家（秀康次男忠昌の子孫、当主は松平慶永）、雲州松平家（秀康三男直政の子孫、当主は松平齐貴）、結城松平家（秀康五男直基の子孫、当主は川越藩主松平直克）、明石松平家（秀康六男直良の子孫、当主は家斉孫の松平慶憲）、津山松平家（秀康長男忠直の長男である光長の養子宣富の子孫、当主は家斉一五男の松平齐民）があった。

\*家慶死去後の將軍継嗣問題について『徳川慶喜公伝』では次のように説明する。將軍家定公小心にして且多病なりしかば、国家多難の際、諸侯を駕馭し、百僚に臨みて号令嚴命なるが如きは得て望むべからず。されば其襲職の前より、大名・幕吏の中には、心ひそかに憂懼する者少からざりき。（中略）されば或は烈公（徳川斉昭）を元帥と仰ぎて、政治・兵馬の権を委ねんと欲する者あり、或は烈公に副ふるに尾張中納言（慶恕）を以てせんとする者もありたれども、中納言は近き頃支藩（美濃高須藩）より入りて宗家を嗣ぎし者なれば、老中等に重んぜられず、烈公は開国の機運と背馳して益疎んぜられたれば、（中略）而して其物色する所は、或は一橋刑部卿（慶喜公）をといひ、或は紀伊中将（慶福、後の家茂公）をといひ、或は尾張中納言をといひ合へるが、中にも刑部卿が幕府の世嗣となり給はんことを望む者は、諸藩・諸士の間に

多かりき。（中略）往年將軍家慶公が、公を選びて一橋家を嗣がしめたる深慮も此に在りと、推測したるに因るべし。

松平越前守（慶永）の家は家門の随一にして、其身も田安家より出でたれば、最も心を宗家の事に傾け、私に幕府の世子たるべき人を求め、指を三家・兩卿に屈したれども、尾張中納言・水戸中納言・田安中納言（慶頼）は、共に齡の程ふさはしからず、紀伊中将は実に前將軍家（家慶公）の甥にして、血統最も近けれども、十歳にも満たざる幼齡なれば、時望に副はず。

⑬百三郎：木野一馬の子。亡くなった時には「百太郎」となっている。

○（嘉永七年七月朔旦）夕木野百太郎義病氣養生不叶、今朝死去致候旨為知来、仍而為悔千代吉遣也

（頭書）「五日、木野亡児法諡 智蓮孩子「村上家乗」続編卷十一（嘉永七年）七月廿日

⑭初昏（しょこん）：日没の直後から初更（一夜を五つに分けた最初の時間）の頃までの時間。

⑮彗星：「クリンカーヒューズ彗星」

\*このほうき星（彗星）は、クリンカーヒューズ彗星（C1853 L1）といい、何年に一回地球に近づくという彗星ではなく、非周期彗星といって、一度近づいたら二度と現れない彗星という。（幕末の空に浮かんだ五つの彗星―試撃行）

\*広島における他記録

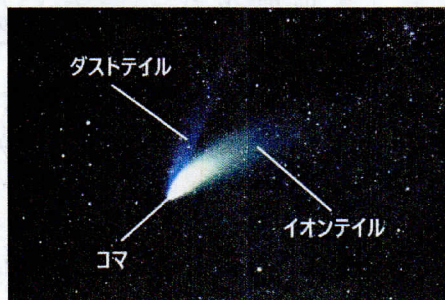
○七月中ごろ、乾の方に当って彗星見へる、尤も先年のよりは少なし、月末には消へる

進藤寿伯著・金指正三校註『近世風聞・耳の垢』（青蛙房）

\*「村上家乗」に現れる他の彗星に関する記事

○（安政五年八月十七日）彗星西方二見

○（同年九月二日）夜其以来久振二彗星を見、此節者余程高く、大二見へ、光芒火焰之如十丈余二及 ※「下ナテイ彗星」「村上家乗」続編卷十五（安政五年）



イオンテイルは核から放出されたガスが太陽によってイオン化したもので、太陽とは反対方向にまっすぐ伸びる。ダストテイルは核から放出されたチリで、進行方向によって曲がって見える（「流星（流れ星）」と「彗星（ほうき星）」の違いって？ | ことくらべ）

○(文久元年五月廿五日頭書) 同夜彗星を西北方二見ル、光芒及天半、昨夜を見候由也 ※「テバツト彗星」 「村上家乗」続編卷十八(文久元年)

○(文久二年七月十五日) 十五日夜、殞星多有之候由  
○(文久二年七月末) 此節西北半天へ夜々彗星出ル、孝氣至微也

※「スイフト・タツトル彗星」 「村上家乗」続編卷十九(文久二年)  
⑬ 彗星(はいせい) …… 彗星(ほうきぼし) の異称。

\*「おおよっぱに定義すると、古代からボツと光る天体を彗星といい、尾があれば彗星とよんだ。」(作間幸太郎「紀元3〜4世紀の天文異変について」(宋書天文志100年の記録) ) ただし、典拠は示されない。

◎七月廿五日

⑰ 瘡乱(霍乱) 症(かくらんしよつ) …… (揮霍瘡乱(きかくりょうらん) の略もがいて手を激しく振り回す意から) 暑氣あたりによつて起きる諸病の総称。現在では普通、日射病をさす。古くは、多く、吐いたり、くだしたりする症状のものをいう。今日の急性腸カタルなどの類をいったか。

⑱ 濕瘡(しつそう) …… 皮膚病。疥癬(かいせん) 虫の寄生によつて皮膚に湿疹を発し、全身に広がってかゆみを起こさせるもの。かいせん。ひぜん。しつ。

◎七月廿六日

⑲ 内証: ①外部には知られないようにしてある考えや意向。②内々にもつている考え。内意。③本当の気持やおもわく。本心。内心。④人に知らせないこと。あらわにしないこと。また、そのさま。⑤うちの事情。内々の様子。内情。

⑳ 惠玉阪本禪孩女: 孩子(がいし)・孩女(がいによ) は五歳までの子供に授ける位号(位牌などで戒名の下につけられる文字)。三歳までの子供に授ける戒名は嬰兒(えいじ)・嬰女(えいによ)、十七歳以下の未成年に授けられる位号は童子(どうじ)・童女(どうによ)。

\*「皈」は「歸」の俗字(異体字)。異体字は通用の正字体に統一するよう努めているが、人名(法名)なのでそのままとした。

㉑ 着具: 用具を身につけること。特に、武装すること。

㉒ 規模: ①物の構え。結構。しくみ。また、全体の計画。企画。構想。②正しい例。模範。手本。法則。規範。③(他の手本、模範となる)ところからほまれ。名譽。ほこり。てがら。面目。

㉓ 空函而已: 江戸時代になり、戦乱の世が終わりを告げると、自らの甲冑を造らせる者もしだいに少なくなつていった。先祖伝来の甲冑を大事にはしても、普段

【補足】

はしまい込んだままで、正月か端午の節句に飾るのがせいぜいだった。(中略)幕末が近くなると外国船が近海に姿を現すようになる。そこで備えが必要となつて、しまい込んでいた甲冑を取り出した方がいいが、どう着たらいいものかわからない。(中略) 着方は忘れても、所有しているだけましかもしれない。江戸中期以降になると、経済的に苦しい武士の中には、甲冑を売り払う物もあらわれた。甲冑を入れる具足櫃さえ飾っておけば、これを勝手に開ける者などいないので、とりあえず体裁は保てる。問題は公用で出張するときだ。道中具足櫃を供の者に背負わせていく決まりだったので、ばれないように櫃の中に鉄製の鍋蓋や、あるうことか石を詰める者もいたという。

小和田哲男『大江戸武士の作用』(株式会社G. B.)

◎七月廿七日

㉔ 秀山智英童子: 村上彦右衛門長男正介。天保十五年七月二十六日死去、

○(天保十五年七月廿七日) 正介夜前咳も無之、終宵快寝無之候へ共至極穩か、今朝も目を覚し少々澁粉煎餅等も給、先居合居候様子候故、予も致出勤候所無程様子替り、何之艱苦も無之四半時前卒病死、予も出勤中、呼来付早速帰り候所、最早臨終之趣、間もなく及續絶也、嗚呼天哉命平、生年三歳也  
「村上家乗」続編卷一(天保十五弘化元年)

◎七月八日 ⑯ 井整

○(嘉永四年六月十二日) 午後万之進・栄作来、井側石整を築替、水道石口築直し呉ル

◎七月十三日 疣虫

回虫・蛔虫: 線虫類カイチュウ科の人体寄生虫。形はミミズに似ているが節はなく、淡桃色ないし黄白色をしている。雌は二〇〜四〇cmで雄より大きく、雄は一五〜二五cmで尾端が鉤状に曲がる。卵が野菜や塵に付着して人体に侵入して、胃や小腸などで成虫になる。体内での移行性が強く、胃・脳・内耳・泌尿器などに侵入することがあり、回虫症のほか、異味症・虫垂炎などをおこす。

回虫症: 回虫が消化管内に生息していても、なんらの症状を起こさないですむこともあるが、また一方では腹痛・嘔吐・痙攣・高熱など、種々雑多の症状を呈する。徳川時代には回虫症が多かつたために、回虫症だけをとり扱った書物が数種刊行された。これらを見るに、回虫症も治療はつぎの如く要約できる。攻める場合すなわち駆虫、補う場合すなわち安蛔と、温める場合と冷やす場合と、これらを組み合わせたものからできていて、それぞれの症状によって取捨選択して用いる。(『漢方診療医典(第六版)』南山堂)

令和六年十一月例会資料（十一月分後追い）

家乗嘉永六年 六月廿日頭書〜七月十三日

一、先月の解読文活字読みの確認点 なし

二、指摘・意見・質問・他

① 七月二日『些肝二癩候哉』『癩（癩）』

障害・障碍 「障」「碍（礙）」ともに「さしつかえる（さわる）」という意味の単語で、何かことを行うときにさしつかえてしまうことを指します。（国語辞典）

新室及び墓屋を造るに当つて、これに碍（さへ）る者を、（日本文学の発生（新字旧仮名）／折口信夫（昭和七年初出）（ふりがな文庫））

正当な読みではないかもしれませんが「些肝にさわり候か」と読んでも良いのかもしれない。

② 七月三日『藤川おとめ』の生年

嘉永四年六月三日「藤川おとめ母氏今朝安産、女子出生之旨為知来」が藤川おとめの出生の記録と思われま。

③ 同日『藤川おとめ痘之由』

当時何人か痘に罹患し、死者も出、少し後藤川広次も罹っている。前後に引痘・種痘の文字が無いので、爰は種痘後の記事ではなく、疱瘡に罹ったものと思われま。尚、彦右衛門の周りでの種痘に関しては嘉永四年二月十二日頭書に

「近来引痘術稍行れ、此御多門内彼是致種痘候由二而、盛岡ニもお左代今日方致種痘候由也、主水様御医師三宅春齡施術候也、春齡專此術を行候由、誠良法也」その後十一月廿日に幾三郎も種痘を受けています。

④ 七月六日 大了院様墓の写真（2013/314 海蔵寺）



⑤ 同日『仕成』（例会で説明済）

仕成Ⅱ「しなし」のフリガナ100%

仕なし…しなし【為成す・為做す】①何かの状態にする。作りなす。（『広辞苑』）…くのようにする。（『明解古語辞典』）

しなしⅡ為做し…①仕来り、風習 ②もてなし、しわざ

（明解古語辞典）

⑥ 七月八日『井登石炭を修覆ス』

万延元年七月七日「兵蔵井砌之油石灰を直ス、砌Ⅱ①石だたみ。軒下の敷き石。ですから井砌と井登は同じ意味です。

漆喰Ⅱ消石灰を主原料とした壁材量。漆喰油Ⅱ漆喰製品に混ぜて耐水性を向上させるしつくい油。油を混ぜた漆喰は城や土蔵の壁、瓦葺の面戸等雨水に晒される場所に使う。…今回の家乗の石炭は油石灰・油漆喰の事か？

石炭は当時北九州の一部では使われていましたが、井戸周りに使用したとは思えません。敷瓦・敷石の隙間を埋めたり石積の接着に用いる現代のセメントの様に防水・水漏れ防止につかつた石灰を石炭と書き間違えたのだと思います。

三、報告・お知らせ

◇ 次例会は、一月十一日（第2土曜日）午後一時半です。於第一・第二研修室。第二研修室白板を前とします。当日の会場当番は、A5班及びB6班です。

二月例会は、二月廿二日（第4土曜日）です

三月例会は、三月廿二日（第4土曜日）です

四月例会は、四月十二日（第2土曜日）です。

五月例会は、五月十日（第2土曜日）です。

◇ 来月は席移動月です。席移動をお願いします。班単位で前月より1つ宛前にお進み下さい。一番前の班は最後列へお廻りください。

\*\*\*\*\* 萬津箱 \*\*\*\*\* (余談) \*\*\*\*\*

○ 疣虫を調べてみました。（令和二年十月例会資料に既出）

確かに疣虫は、カマキリの異名としか何を調べても出て来ません。日本各地に疣をカマキリに食わせて取り除くまじないがあり、イボカキムシ・イボムシ等といったようです。

ですが、家乗での疣虫は「腹の虫」ですからカマキリの訳がありません。腹の虫といえば寄生虫です。主なものは回虫・蟯虫・条虫（真田虫）でしょう。色々調べてみると回虫が当てはまりそうです。（次ページへ続く）

主に文学作品、漢字の読み方の使用頻度を検索できるサイト

（ふりがな文庫）

## 回虫症 (時事メデイカル)

成虫が小腸で静かにしているときにはほとんど症状はありませんが、幼虫が肺を通る時期に、いろいろな症状がみられることがあります。熱っぽかったり、ぜんそくのようなせきが出る場合があります。ふつうは、回虫が自然に肛門から出たり、検便で虫卵が見つかったりはじめて気づきます。

しかし、たくさんの虫が寄生した場合には腹痛、吐き気、下痢などのほか、たくさんの虫が塊状にもつれて腸閉塞を起こす(死ぬこともあるようです)。こどももあります。回虫が胆管や虫垂などに頭を突っ込んだときには激しい痛みがあり、胃に頭を突っ込んだときには虫を口から吐き出すこともあります。(他の寄生虫では「口から吐く」の記は見られませんでした。)

「慈君夜半方今朝疣虫二ツ御吐被成(安政二年五月)

さらに調べてみました(目黒寄生虫館・はらのむし通信 第193号)

日本で初めて寄生虫について書かれた書物は、日本最古の医学書である『医心方』(887年)です。これに記された9種の寄生虫は中国の『諸病源侯論』(610年)からの引用ですが、9種うち6種は想像上の虫で、残りの3種、すなわち、①蛔虫(「蛔虫ゆうちゆう」、長虫ながむしともいわれる、現在の回虫に相当)、②蟯虫(現在の蟯虫に相当)、③白虫(現在の無鉤条虫または有鉤条虫に相当、が現在知られる寄生虫に当てはまると考えられています。

回虫を「蛔虫ゆうちゆう」と書いています。(「蛔虫はカイチュウとも読みます)

「疣(ユウ・カイ・あくた)虫…人の腹の中に寄生する虫。回虫、腹の虫。

(日本国語大辞典)

「疣」も(ユウ)と読みますし、「尤」を字に含みます。

彦衛門さんが「蛔虫」と書くべきを、病気だから病垂れの「疣」と思いこんで、カイチュウのつもりで「疣虫」と書いていたのかもしれない。想像でしかありませんが???

昭和40年頃までは人間の排泄物を肥料として用いていたため、排泄物とともに体外へ出た卵が、農作物を通じて次から次へと感染・寄生されると栄養失調になったり下痢を起こしたり、倦怠感がひどくなって日常生活に影響が出るんですって。まあ、生死に関わるほどの病気ではないものの、大変やっかいな病気でした。

(くすりの博物館)

## むくじまごころ話 (Wikipedia)

江戸時代には、その人糞を出す階層により、その価値が違い、栄養状態のよい階層(最上層は江戸城)から出された人糞は、それより下の階層(最下層は罪人)が出す物より高い値段で引き取られた。江戸城から出る人糞は、葛西村が独占していた。長屋に併設された共同便所は、これらの肥料原料を効率良く収集するために設置され、ここから得られた肥料で城下町周辺の農地は大いに肥え、町民に食糧を供給し続けた。江戸落語の中に店子が喧嘩した大家へ二度とめえの長屋で糞してやらねえ!と捨て台詞を吐く描写があるが、それはこのような背景があるためである要出典。

明治時代においても人糞は貴重な肥料であり、高値で引き取られた。そのため、学生などが下宿する場合においては、部屋を複数人以上(具体的人数はその時の取引相場で異なる)で共同で借りた場合は、部屋の借り賃が無料になることもあった要出典。



妙慶院の百万遍大数珠繰り (中区小町)

村上家菩提寺の浄土宗 妙慶院において数珠繰りが行われていることを、以前テレビ番組(地方版)で見た覚えがあるので、妙慶院のホームページを覗いてみると、たくさん出ていました。偶然これを書いている11月23日には毎年恒例の「お十夜法要」とかで百万遍大数珠繰念仏が行われ、またそれに限らず、何かと法要の際おこなわれるようです。数珠は本堂一周より長い35mもあるそうです。